NPO 法人 おおさかこども多文化センター　Newsletter

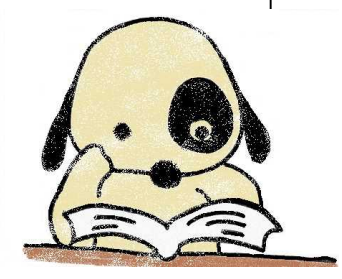
OKoTaC 通信

オコタック

2014 年 12 月 20 日発行

NO.20

P 2-3　NPO活動報告
『多文化にふれる　えほんのひろば 2014』
P 3　多文化な子ども@大阪 のニュース
『大阪府立福井高等学校』
P 4　地域の子ども支援教室から⑳
『すみのえふれあい日本語サークル』(大阪市住之江区)
P 5　特別寄稿
『NPO まなびや@KYUBAN の活動実践』(名古屋市)
P 6　Air Mail　メキシコ便り⑱
『チリのサンチャゴ、イキーケ』
P 7　特別寄稿
『外国人母子を社会から孤立させない大阪プロジェクト』
P 8　イベント情報、クリアファイル作成ご協力ありがとうございました



おおさかこども多文化センター 活動報告

『多文化にふれる えほんのひろば 2014
～出会ってわくわく！いろんなおはなし、せかいのいろんなおともだち』

11 月 29 日（土）、30 日（日）の 2 日間、西区の大阪市立中央図書館で、子どもゆめ基金助成事業「多文化にふれる えほんのひろば」を開催しました。日本語・外国語あわせて 16 言語、約 650 冊の絵本をずらりと並べて、地域に住む外国から来た親子に母語の絵本を楽しんでもらうと同時に、日本人には身近な多文化の存在にふれてもらおうという企画で、今回で 3 回目です。

今年は両日ともに実施した「多言語おはなし会」では、6 言語のべ 8 名のボランティアさんに、それぞれの母語で絵本の読み聞かせをしてもらいました。各国の作品は、南米の先住民に伝わる昔話や、中国の大晦日の風習をモチーフにしたおはなし、おやつをめぐる親子のやり取りが生き生きと描かれたものなど、どれもその国の文化や雰囲気にふれることができる絵本ばかりです。会場いっぱいに集まった参加者は、ほとんどが初めて耳にする言語であるにもかかわらず、みな興味津々で聞き入っていました。その中の一人、伝統的な定型詩のリズムで語られる有名なおはなしを紹介してくれたベトナム出身の女性は、その詩に曲がついてできたという子守唄も披露してくれました。彼女自身も子どものころ聴いて育ったというベトナムの優しいメロディーに、会場はうっとりと聴き入り、またそんなママの姿をにこにこと見つめている、日本生まれの娘さんの嬉しそうな様子も印象的でした。

また、来場者の子ども（日本語）と多言語スタッフ（外国語）との“掛け合い読み”では、同じセリフを複数の言語で繰り返しながら読み進む中で、「どきっ」や「ほっ」といった気持ちを表す擬音語が、言語によってそっくりだったり全然違っていたりするのも面白く、大人も子どもも楽しみながら他言語のひびきを体験しました。テンポよく掛け合いの相方を務めてくれたタイとフィリピン出身の長吉高校の生徒さんたちの息もぴったりで、フロアには終始あたたかい拍手と笑顔があふれていました。異なる言語や文化の存在は豊かさなんだということを、自然と感じたひとコマでした。

その他にも、2 日目のワークショップ「おはなしと音楽でインドネシアを感じてみよう」では、日本バリ教育文化交流協会の加藤恭子さんに、バリの伝承物語を紹介していただきました。繊細な絵がびっしりと描きこまれた巨大な絵巻物に、子どもたちは近づいて食い入るように見入り、その後の伝統舞踊の体験にも楽しそうに挑戦していました。

また恒例の「世界の文字を書いてみよう」のコーナーでは、近所の小学校から遊びに来てくれた児童たちが、初めて見る外国の文字で自分の名刺を作り大興奮。佐野高校と門真なみはや高校の生徒さんも、ロシアのキリル文字とハングルの指導で大活躍してくれました。そして、文字を教わるだけでなく、そこから参加者と外国人スタッフの間でさまざまな話題で話が弾んだり、スタッフ同士で日本での子育てについて情報交換したりする光景も多く見られました。

さらに嬉しいニュースがありました。一昨年の「多言語おはなし会」でスペイン語での読み聞かせをしてくれたペルー出身の小学生が、今回も親子で遊びに来てくれ、年末の地元の子ども会行事で再びスペイン語で絵本を読むことになったと報告してくれたのです。今度は何を読もうかなぁと、展示されている絵本をいろいろ手に取って探している彼の姿に、2 年前この「ひろば」で初めて大勢の人の前でドキドキしながら母語で朗読をし、読み終わったあと何ともいえない誇らしげな笑顔を見せてくれていたことが思い出され、母語を使って活動する機会が地域で継続してあること、そしてそれを楽しいと感じてくれていることに、とてもあたたかい気持ちになりました。

この 2 日間、絵本をなかだちにいろいろな人々が出会い、さまざまな言語や文化や価値観にふれることができました。またおはなし会や、展示絵本をそれぞれの母語で自由に楽しみ交流する参加者の姿に、母語・母文化の発信の機会の大切さや、親子が共通の言語でおはなしの世界を楽しみ、伝えていくことの意義を、あらためて考えました。そのためにオコタックができることを、これからも丁寧に探っていきたいと思っています。　　（A. N）

「多文化にふれる えほんのひろば」に参加して――　　（ボランティアスタッフ　豊田富恵）

私は昨年に引き続き、フロアでの絵本の読み手スタッフとして参加しました。来場者は絵本を親子で読んだり、小さな子は目についた絵本を次々と持ってきては戻しをくり返したりして、とても楽しそうです。「読もうか？」と話しかけると、待ってましたとばかりに差し出す子、モジモジしてる子…。読み始めると、国籍に関係なく子どもたちが一人二人と寄ってきて、輪が広がります。

こんなこともありました。5歳くらいの女の子が、入口に展示してある海外の大型絵本の中から1冊選んで一緒にめくり始めました。外国語なので「読んで」と言われたら困るなぁ…と思っていたら、「この子はこのくだものが食べたいの」「この男の子は草の中でひっくり返ってしまった」等々、絵を見ながら次から次へと自分からおはなしをしてくれます。「どのくだものが好きなのかな？」とクイズにしたりして、20 分近く楽しい時間を過ごせました。絵本は、字があるから読むもんだと思っていたのは、私の思い込みでした。

手があくと、会場のスタッフ同士で互いの国の話で盛り上がったり、また多言語おはなし会が始まるとほとんどの参加者が見学し、1 時間あまりをとても集中して聞いてくれていたのは嬉しい驚きでした。昨年より若干少ない来場者でしたが、そのぶん余裕を持って向き合えて満足しました。タイ語・中国語などの言葉のリズムで楽しめるのも素敵だったし、知らなかった絵本との出会いもありました。「多文化にふれる えほんのひろば」の輪が確実に広がっていると感じつつ、スタッフとして参加できるのを嬉しく思っています。

多文化な子ども＠大阪 のニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

大阪府教育委員会は 2015 年度入試より渡日生徒を対象とする特別枠設置校に福井高校を加え全６校としました。そこで編集部では福井高校の森田先生に学校紹介をお願いしました。福井高校と言えば府内の高校の中でも人権教育については優れた実践をされている学校として有名です。（編集部）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大阪府立福井高等学校は、茨木市の北西部に位置し、山の麓にある自然に恵まれた学校です。これまで普通科総合選択制高校として様々な取り組みを行い、成果をあげてきました。来年度からは、総合学科高校にリニューアルされるとともに、新たに『中国等帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜』を実施します。

福井高校は 100 を超える選択科目を設置しています。2 年生で 14 時間、3 年生では 18 時間の選択授業があり、個々の進路希望に対応した科目や自分の得意なこと・興味のあることを学ぶことができます。これらの選択科目には、「国際」「福祉」「保育」をはじめ、他の普通科高校ではなかなか学習できない専門的な内容が多く含まれています。「中国語」や「韓国朝鮮語」の授業もあります。また、生徒が自分を見つめ、将来を考え、選択する力を身につけるための、「ドリカム（Dreams Come True の略）」という授業も行っています。科目選択をサポートするためのガイダンスの他、職業調べや学校見学なども行い、3 年間の学びの総まとめとして研究発表にも取り組みます。

『中国等帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜』で合格した生徒には、必要に応じて個別授業や特別授業などを実施し、日本語指導や母語保障のサポートを行います。また、帰国生徒や渡日生徒が相談できる体制も整えています。

お問い合わせは学校まで直接ご連絡ください。

〒567-0067　茨木市西福井 3-33-11　　TEL　072-641-4361

（大阪府立福井高等学校　首席　森田正良）

多文化な子ども あつまれ！　～地域の子ども支援教室から～⑳

『すみのえふれあい日本語サークル』（大阪市住之江区）

「日本語サークル」という名称から、日本語教室と思われるかもしれませんが、日本語習得支援のみならず、外国人の生活・子育て支援活動に取り組んでいます。学習者は、留学生、研修生、ワーキングホリデーで来日した人、日本人と結婚した配偶者と子ども、外国人労働者と家族、レストラン経営者、介護士、会社員などです。来日の理由や状況はさまざまですが、滞在期間の長期化＝定住化が進んでいます。そのため、日本語習得支援を基本としながらも、生活全般とりわけ子育て支援活動にも力を入れるようになりました。

サークルは大阪市住之江区を基本に活動していますが、隣の住吉区、西成区、堺市などからもボランティア、学習者が参加しています。日本語学習のほかに、家庭料理の講習会、防災センターなどの施設訪問、親子連れ遠足などの楽しい行事も実施しています。

子ども支援活動を紹介します。

◎学習・学校生活支援

保育所や学校からの連絡文書などを一緒に読み、親子ともに理解できるよう協力しています。必要な場合は、家庭訪問、参観、懇談会、入所説明会等に同席し、学校や保育所生活への理解を助け、親子ともに不安なく通園・通学できるよう支援しています。また、日本語学習のほかに、宿題や教科学習も支援しています。特に社会、国語は母国でない国の文化、ことばを勉強する教科なので大変です。教科書の仮名ふりや、日本文化の説明なども必要です。

◎妊娠・出産・育児にかかわる支援活動

滞在期間が長くとも、役所や病院で日本人と同じように会話し、相互理解できる日本語能力を獲得することは本当に難しいことです。文化も習慣も制度も母国とは大きく異なる日本での妊娠・出産・育児は不安と困難が伴います。妊娠・出産において、医師、保健師、助産師と意思疎通ができるよう、検診や母親教室、乳児健診、予防接種等へ付添い、保育所入所の手続きなども支援してきました。

◎日本での教育保障、進路決定等に対する支援活動

再婚後の生活が安定したからと、学年途中で日本に呼び寄せた子どもの入学手続きは非常に複雑でした。ボランティアが、区役所・教育委員会と学校への橋渡しをして、ようやく学校に入学できました。あわせて、サークルでカタカナ・ひらがなの読み書きを練習し、学校の教科書を借りて読む練習もして一日も早く日本の学校生活に慣れるようサポートしました。

母親と一緒に来日した子ども達（子どもの父親は日本人。日本国籍）の例です。母国の中学を退学し来日した男の子は、日本と母国の学校制度の違いにより日本の中学に編入できませんでした。母親は区役所へ相談に行きましたが、適切なアドバイスが得られず、友人の紹介でサークルに来ました。私たちは、外国人の子どもの進路相談等に取組んでいるボランティア団体と連携をとり、大阪府教育委員会への手続きや、夜間中学の見学、学校選択を経て、男の子は外国籍の子どもが多数通う府立高校へ入学しました。また、大学を中退して来日した子どもも同様の支援活動を経て、府立の高校へ編入できました。子ども達は、私たちのサークルや大阪国際交流センターにある「こどもひろば」での日本語学習を経て、現在元気に高校生活を送っています。就職内定のうれしいニュースも入ってきています。

10組に1組は国際結婚といわれ、外国人労働力のさらなる活用が検討されている折、日本社会が真の共生社会になることが急がれています。大人のみならず外国にルーツを持つ子ども達が、元気に安心して生きていけるよう地域からサポートしていきます。

（ボランティア　西野容子）

活動場所　：　〒559-0006　住之江区浜口西 3-4-22　住之江区子ども・子育てプラザ

日　　時　：　毎週土曜日 13:30～16:00（第 2 土曜日は 14:00～16:30）

問合せ先　：　℡ 06－6685－8807（代表　富田みとせ）

e-mail　spkv6k29@diary.ocn.ne.jp（ボランティア　西野容子）

特別寄稿　ＮＰＯまなびや＠ＫＹＵＢＡＮの活動実践

ー外国人集住地区、名古屋市「九番団地」における子どもの居場所づくりー

NPOまなびや@KYUBAN　代表　川口祐有子

編集部より

前号では愛知県で活動されている川口さんに、名古屋で開催された「絵本のひろば」についてご報告をいただきましたが、今回は自ら代表をされているNPOによる「九番団地」での活動の紹介です。

前回は、オコタックの活動をモデルに名古屋で初めて開催した多言語絵本イベント「絵本のひろば」の報告をさせていただき、結びに、「『絵本のひろば』では、私が代表を務める『NPO まなびや@KYUBAN（以下まなびや）』の『空気感』を作り出したかった」と述べました。今回は来年度設立 7 年目を迎える、まなびやの活動実践についてお伝えしたいと思います。

まなびやは、リーマンショックが起こった平成 20 年(2008 年)に、任意の市民団体として発足しました。九番団地のど真ん中にある、1 棟の団地集会所で、毎週月・水・金の午後 3 時から 7 時まで、地域の子どもの交流スペース「こどもひろば」を主宰しています。活動拠点である UR 都市機構「九番団地」は、名古屋市内最大の外国人集住地区で、1,345 戸のうち、外国籍住民が約 3 割を占めます。外国籍住民のほとんどがブラジル人ですが、ペルー・フィリピン・中国・ミャンマー・アフリカ出身の家族も住んでいます。団地の中には公立の小学校と保育園があり、小学校には約 3 割、保育園には約 8 割の「外国につながる子ども」が在籍しています。

まなびやの活動の特徴は、「外国人支援活動のみをしているわけではない」ことです。「こどもひろば」は、保育園児から大学生まで、地域の子ども約 60 名が利用していますが、半分が外国籍の子ども、半分が日本人の子どもです。日本人の子どもが外国人の子どもの宿題をサポートすることもあれば、反対のこともあります。年上が年下の子どもに助言することもあれば、年下が年上の子どもの相談にのることもあります。遊ぶときには、国籍や年齢や性別に関係なく、みんな一緒に遊びます。そして彼らはお互いにフラットでフェアーな関係を築いているのです。

なぜ、まなびやが「外国人のみを対象にした活動を行なっていない」のか。それは、九番団地の地域特性にあります。九番団地では行政や地域団体があえて「外国人対象の～」といったイベントや事業を行なっていません。誰でも参加できる事業を企画し、外国人の対応もできるというスタイルで活動しています。「多文化共生」を呼びかける人はいないし、「多文化共生」という言葉を知っている人は少ないです。しかし「多文化共生」の理念が根付いている。九番団地はそんな地域です。それは、地域の保育園、小・中学校、子どもの個々の家庭や地域住民、行政、市民団体の 10 年以上にわたる連携の取組みの結果です。

最後に、平成 23 年(2011 年)、まなびやに新たなグループが発足しました。中学生以上が加入できる「まなびや青年部」です。主な活動は後輩の勉強と進路のサポート、地域のイベントのお手伝いです。現在、約 20 名の多国籍な中･高校生がメンバーになっています。今後、彼らが地域の担い手として活躍してくれるだろうことを考えると、とてもワクワクします。地域を愛する人が地域を育て、郷土愛と人間愛にあふれる九番団地。みなさんも、一度遊びに来てください。

メキシコ便り⑱「チリのサンチャゴ、イキーケ」

（おおさかこども多文化センター会員・金野広美）

南北に細長い国・チリのサンチャゴに行きました。飛行機から降りると、雪をいただいたアンデスの山々が美しくそびえていました。それにしても寒い。まるで冷蔵庫の中にいるようで、急いでホテルに向かいました。サンチャゴの街は旧市街と新市街に分かれ、名所旧跡は旧市街に多いのですが、街の中心は新市街に移り、旧市街のほうは夜 10 時を過ぎるとひっそりしてしまいます。

次の日、キラパジュンの歌で知ったイキーケに行きました。イキーケはサンチャゴから飛行機で 3 時間足らず、バスだと24時間はかかる、チリ北部の街です。19 世紀に内陸部から産出する硝酸塩の積み出し港として繁栄した港町で、今では漁業が主要産業となっています。空港に着いた時は、サンチャゴとのあまりの違いにちょっとびっくりしました。というのはここの空港の周りは一面砂漠で何もありません。でも乗り合いタクシーで 30 分も走ると美しい海岸線の続く街が見えてきました。街の中心はメルカード（市場）で郊外へのバスが頻繁に出ていきます。その日は到着が遅かったので次の日、イキーケから 45 キロ東にあるハンバーストーンとサンタ・ラウラに行きました。ここは硝酸塩の産出が盛んだった頃に 300 あまりあった硝石工場のひとつで、今ではゴーストタウンになり、世界遺産に指定されている所です。ハンバーストーンには 3700 人、サンタ・ラウラには 870 人の住民がいたそうです。広い敷地に工場や学校、劇場の跡が残り、当時の繁栄がしのばれました。しかし砂漠の中に残る赤さびた廃墟は、やはりうらさびしいもので、色とりどりの民芸品を並べたみやげ物屋だけが妙に突出していました。

次の日はバスで 3 時間のマミーニャというところに評判の温泉があるというので行ってみました。メキシコではお風呂といっても風呂桶がなく、シャワーだけの生活が何ヶ月も続いていたので、温泉と聞くと気持ちがグラリと動いてしまうのです。ここの温泉は真っ黒の泥を体中にぬり、太陽にさらしながら歩き回り、最後に温泉で流すというものなのですが、周りからまる見えで、試してみる勇気がわきませんでした。仕方がないので湯だけの風呂に行きましたが、何と日本の温泉とは似ても似つかないものでした。小さな個室にお湯の入っている穴と堅い木のベッドがあるだけ。これで1時間 300 円。うーん、安いのか高いのかわからないまま、湯につかりました。しかし中は湯かげんも丁度でとても心地よく、すっかりリラックスしてしまいました。

次の日の朝、ホテルの近くの港に行ってみました。たくさんの露店が出て、とれたての魚をさばきながら売っていました。ティブロンという白身魚の全長 2 メートルはあるものは1キロ 400 円、コングリオというのはアナゴなのですが、身が厚く白身魚のようなもので、1匹 100 円、アルバコーラという白身魚も束にして売っています。この他にもたくさんの貝類など、実に種類が豊富で、近所の人たちが買いにくるのか、よく売れていました。港の中にあるレストランでアルバコーラが食べられるというので、注文したところ巨大な唐揚げで出てきました。朝からこれはちょっと食べられないと思い、店の人には悪いのですが、衣を全部はがして食べました。中から出てきたのは柔らかい白い身でホクホクしてとてもおいしかったです。このようにイキーケの街をいろいろ楽しんだのですが、最後にキラパジュンが歌っていた事件(硝石工場で待遇改善を訴えたデモ隊に軍隊が発砲し、2,000 人余りが犠牲になった)のあった場所に行ってみたいとガイドのエステバンに聞くと、多くの人が殺されたサンタ＝マリア小学校は、メルカードの前にあったそうです。今では別の建物が建っていました。メルカードは朝 8 時前から夜 12 時過ぎまで開いていて、とてもにぎやかに人が行き来し、昔の悲惨なできごとを思い起こさせるものは何も残っていませんでした。

特別寄稿　外国人母子を社会から孤立させない大阪プロジェクト

（特活）関西国際交流団体協議会　　松本　彩

編集部より

オコタックでは近年、関西国際交流団体協議会（関団協）が行われている標記の事業に関心を寄せていました。そこで今回は関団協の松本様に事業の紹介をお願いしました。

また、来年 2 月 7、8 日（土、日）に関団協が事務局を担われているワン・ワールド・フェスティバルでは、オコタックも協力させていただく企画を予定しています。（次ページに詳細を掲示しています）

（特活）関西国際交流団体協議会は、関西に拠点を置く国際協力や国際交流を実施するNGO・NPO や他のセクターの連携を促進するため、1984 年 12 月に設立されました。今年で創立 30 年を迎えます。

「外国人母子を社会から孤立させない大阪プロジェクト」は、今年度当協議会で取り組んでいる外国人母子支援事業です。同事業は大阪で急増する在住外国人（政令指定都市の中では人口比率が最も高い）、その中でも特に外国人母子家庭の社会的孤立に対し、NPO・行政等による協働・連携を通じたネットワークで彼女らを支援し、地域住民と外国人が共生していく社会をつくることを目的に 2012 年度から始めました。初年度、NPO・行政・学校関係者・在阪領事館など 43 の団体・個人の参加による課題の共有や解決のための研究会からはじまり、ネットワークの形成と具体的な支援の取り組みをこれまで実施してきました。今年度は以下の取り組みを行っています。

ネットワークミーティング

1）ネットワークミーティング

外国人母子支援に関する課題理解を深め、連携をより強化していくためのネットワークミーティングを実施しています。支援ネットワークとして目指すもの、また市民へ何を伝えたいか、という話し合いや、外国人当事者の方にお越しいただき、日本で子育てすることや情報を入手することの困難さなどの経験談の共有も行いました。

2）外国にルーツを持つ子どもの放課後学習教室「Minami こども教室」

Minami こども教室

外国にルーツを持つ子どもたちは日本語での学習に困難を抱えたり、仕事が忙しい保護者とのふれあいの時間が少なく、夜間に1人で過ごすことも多く見られます。彼らの学習支援と居場所づくりのため、毎週火曜日の 18 時～20 時に、大阪市中央区の子ども・子育てプラザにて、放課後教室「Minami こども教室」を実施しています。他地域で子ども支援を行う団体や、地域の小学校らと実行委員会を立ち上げ、運営を行っています。夜の時間の支援教室開催は全国的にも珍しい取り組みで、開始当初から想定を上回る子どもたちの参加があり、子ども、ボランティアの数とも増加してきています。週に1度の教室でできることは限られていますが、それでも「この教室に通って勉強がわかるようになった」という子どもの声も届いています。

3）在住コミュニティ支援セミナー・相談会の開催

大阪市内で比較的人口の多い国籍の在住コミュニティとその家族、支援者を対象に、日本での生活に必要な情報を提供するセミナーと個別相談会を開いています。在阪の各国領事館や外国人支援団体と連携して実施しており、2013 年度にはフィリピンコミュニティを対象に実施しました。次はタイコミュニティ向けに、準備を進めています。

以上のように、本取り組みは対象別にさまざまな手法で丁寧な事業を実施することにより、ネットワークの強化と具体的支援の充実につながり、大阪における住みやすいまちづくりのモデルケースとして、地域レベルで行える協働の実践事例となることを目指しています。

（特活）関西国際交流団体協議会（担当：松本　彩）
TEL：06-6944-0407　FAX：06-6944-0408 http://interpeople.or.jp/　E-mail：kna@pianpo.com

イベント情報　～おおさかこども多文化センター主催のイベントです～

▼ シンポジウム「外国につながりのある子どもたちの『居場所』づくり」

言葉・制度・文化の違いの中で懸命に生きる、外国にルーツのある子どもたちの抱える課題とその支援について、3 つの事例から考えます。皆様のご来場をお待ちしています。

（ワン・ワールド・フェスティバルのプログラムの一つとして行います）

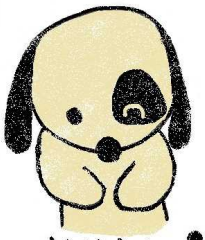
日　時　：　**2015 年 2 月 8 日（日）　15: 00～17:00**
会　場　：　メビック扇町ロビースペース（大阪市北区扇町 2-1-7　関テレ扇町スクエア 3F）
講　師　：　伊東　浄江さん　（特定非営利活動法人 トルシーダ代表）
　　安野　勝美さん　（中学校教員）
　　松本　　彩さん　（特定非営利活動法人　関西国際交流団体協議会）
定　員　：　60 名　（参加費無料、事前申し込み不要）
主　催　：　（特活）関西国際交流団体協議会、（一財）アジア・太平洋人権情報センター
　　NPO 法人おおさかこども多文化センター
問合せ：　ヒューライツ大阪　E メール：webmail@hurights.or.jp　　TEL：06-6543-7003

▼ 学習会「デリート教材ってなあに？　つくり方を学びましょう！」

― 国語科の学習支援におすすめです！―

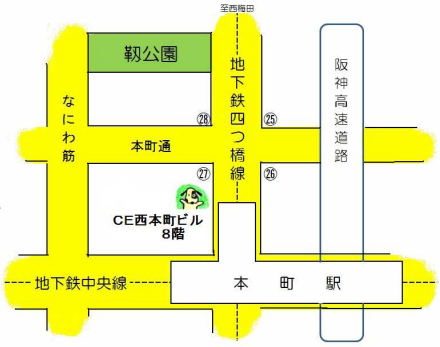
「デリート教材」は、外国にルーツをもつ子どもが、国語の学習に少しでも取り組み易くなるよう考案されました。みなさん、一緒にデリート教材の作成に挑戦してみませんか？

日　時　：　**2015 年 2 月 14 日（土）14: 00～16:00**
場　所　：　ヒューライツ大阪・セミナー室　（大阪市西区西本町 1-7-7　CE 西本町ビル 8F　）
講　師　：　松田　多枝子さん　（元「帰国した子どもの教育センター校」教員）
　　渡邊　　勇さん　　（現「帰国した子どもの教育センター校」教員）
資料代　：　500 円（オコタック正会員は 300 円）　　定　員　：　40 名
申込み　：　E メール　osakakodomo@gmail.com　か　FAX　06-6586-9477 まで
　　名前、所属、住所、電話番号、メールアドレスを記入しお申し込みください。



『ころちゃんクリアファイル作成企画』ご協力、ありがとうございました！

9 月当初よりみなさまにお願いしていた『ころちゃんクリアフィル作成企画』が、10 月 31 日に終了しました。おかげさまで、みなさまのご協力によりすばらしい「ころちゃんクリアファイル」1,000 部が完成しました。ご寄付いただいた方々には 11 月上旬に郵送させていただきました。本当にありがとうございました。 詳細は以下のとおりです。

協力者数 18 名、寄付金合計 69,000 円、 作成費用(web 作成業者／クリアファイル作成業者への支払い) 70,452 円
〔不足分 1,452 円につきましては、NPO 事業費から補填させていただきます〕

NPO 法人 おおさかこども多文化センター　　代表　村上 自子
〒550－0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階
Tel / Fax　06-6586-9477
E-mail　osakakodomo@gmail.com
URL　http://okotac.org
郵便振替　【記号・番号】00940－1－272824
（他金融機関からは【店名】〇九九（ゼ ロキュウキュウ）
【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824）
口座名義『ＮＰＯ法人 おおさかこども多文化センター』
〔フリガナ：トクヒ）オオサカコドモタブンカセンター